

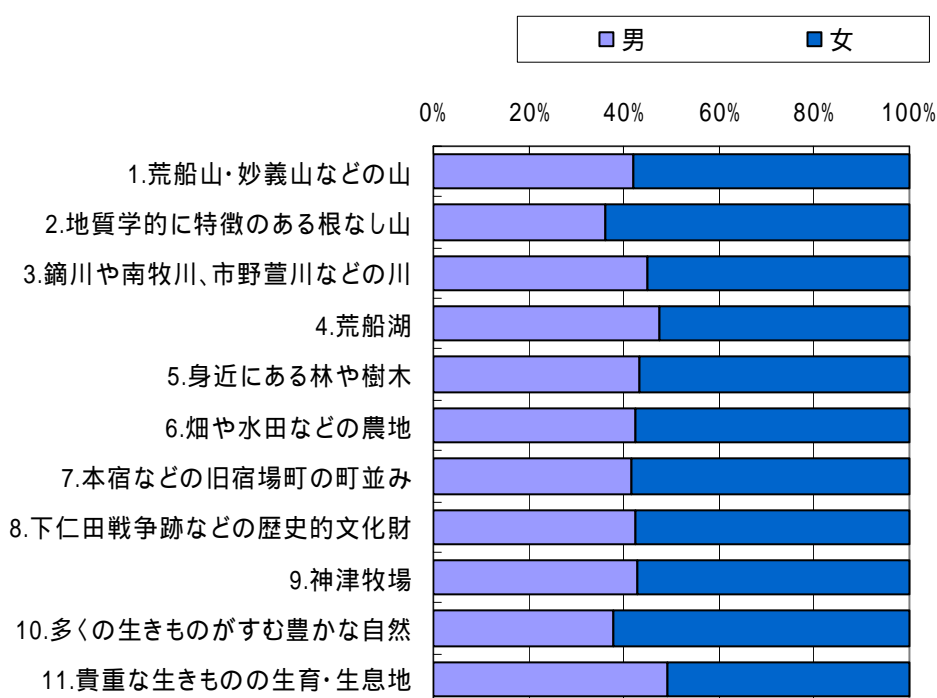
3. クロス集計結果

ここでは、多数の回答が得られた一般町民のアンケート結果について、回答者属性および回答内容別の傾向把握を目的として、二次集計を行った結果を示す。

二次集計では、回答者属性（性別、年代、居住地区、居住年数）および各設問の回答から、設問相互の結果について集計を行った。今回の報告では、それらの結果から傾向がみられた性別および年代別の結果について記載した。

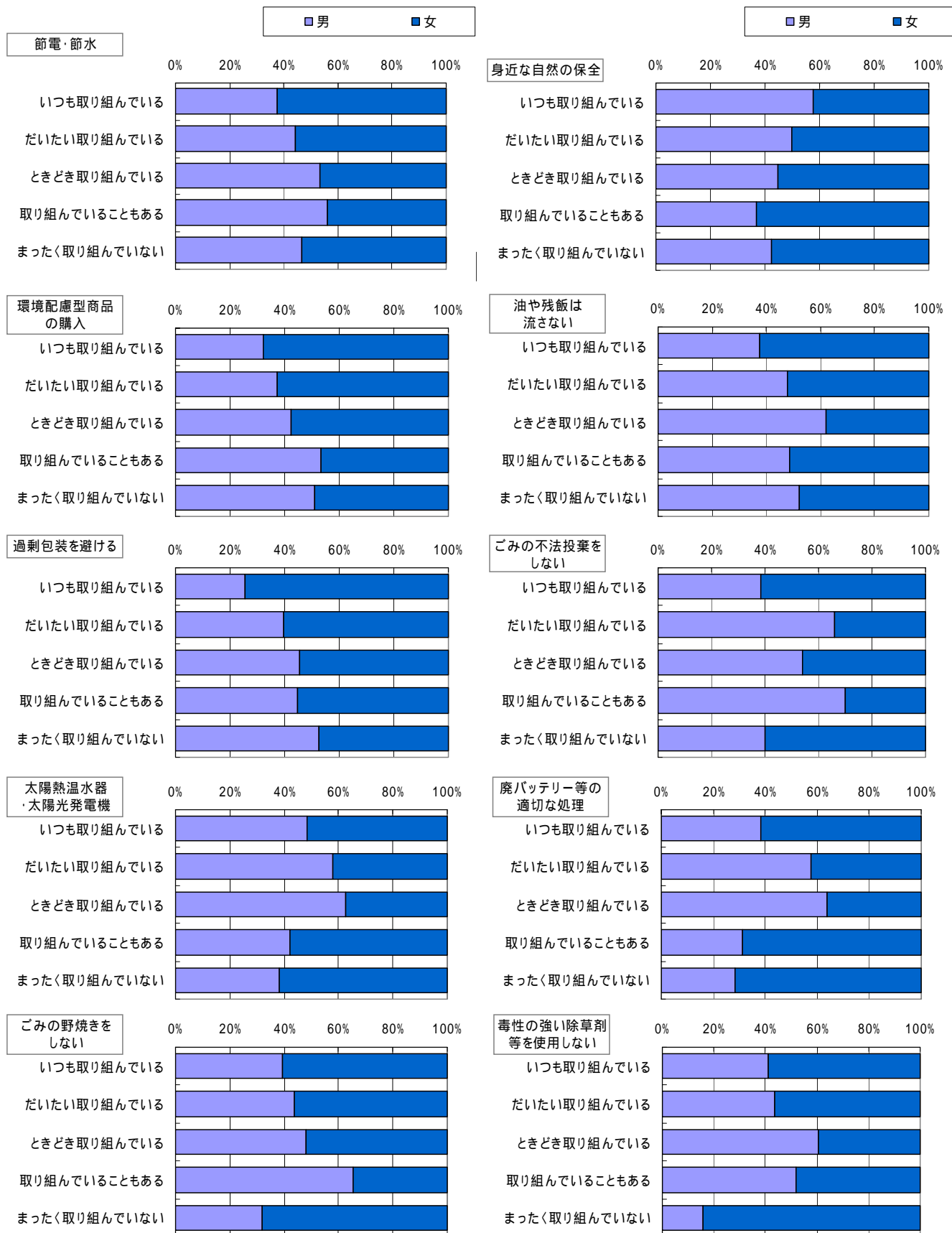
3-1. 性別

町の環境で自慢できるもの、大切だと思うもの



- 回答者は男性よりも女性の方が多かったことを反映して、全体的に女性の回答が多い結果となっている。
- そのうち、「地質学的に特徴のある根なし山」、「多くの生きものがすむ豊かな自然」は女性の回答数が多かった。
- 一方、「荒船湖」、「貴重な生きものの生育・生息地」は男性の回答数が多かった。

ふだんの生活の中での取り組み

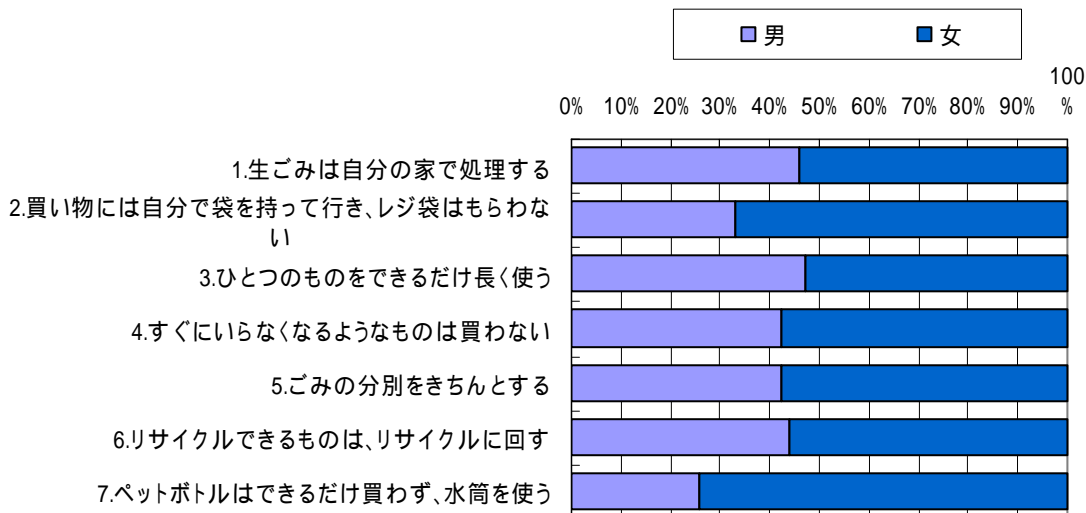


- 全体的に、「いつも取り組んでいる」、「だいたい取り組んでいる」の取り組みの割合は女性の方が高い傾向がみられた。特に、「節電・節水」、「過剰包装を避ける」、「油や残飯は流

さない」などの項目が高かった。

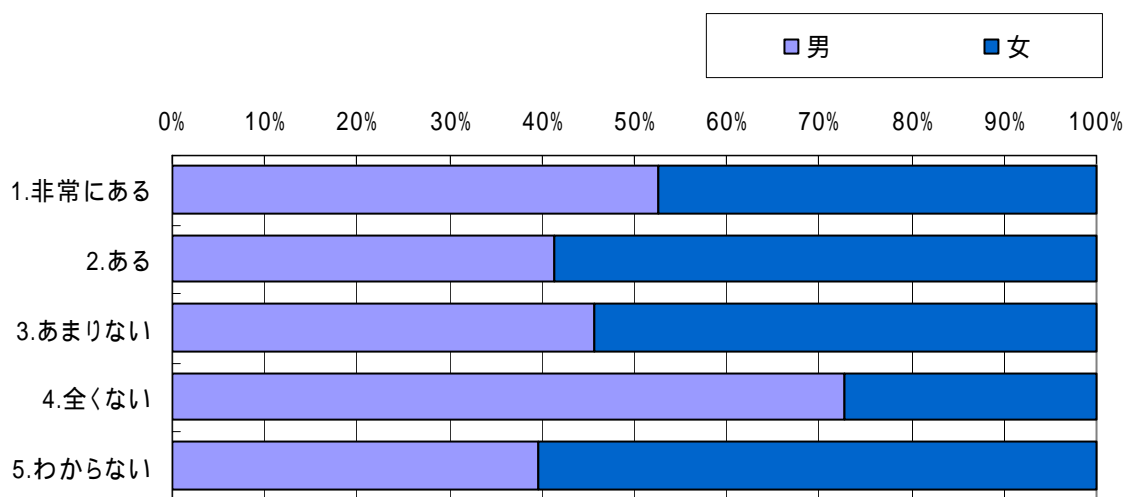
- 男性の取り組みの度合いが高い項目は、「身近な自然の保全」、「太陽熱温水器・太陽光発電機」などであった。

ごみを減らすための取り組み



- 項目によって傾向に違いが見られた。男性の回答数は多かったものは、「ひとつのものをできるだけ長く使う」、「生ごみは自分の家で処理する」などであった。
- 女性の回答数が多かったものは、「ペットボトルはできるだけ買わず、水筒を使う」、「買い物には自分で袋を持って行き、レジ袋はもらわない」などであった。

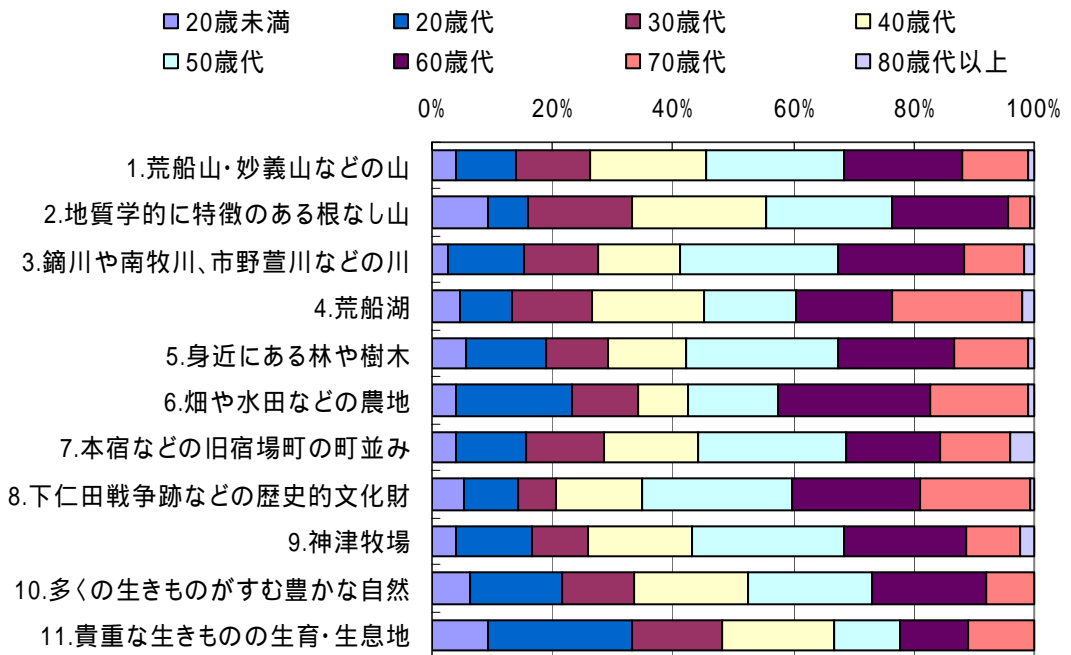
環境教育への関心の度合い



- 「非常にある」は、男性の回答が多かった。一方、「全くない」の回答も男性が多く、この回答の70%以上を占めた。
- 「ある」という回答は女性が多かった。このため、性別からは関心の度合いは一概に判別できなかった。

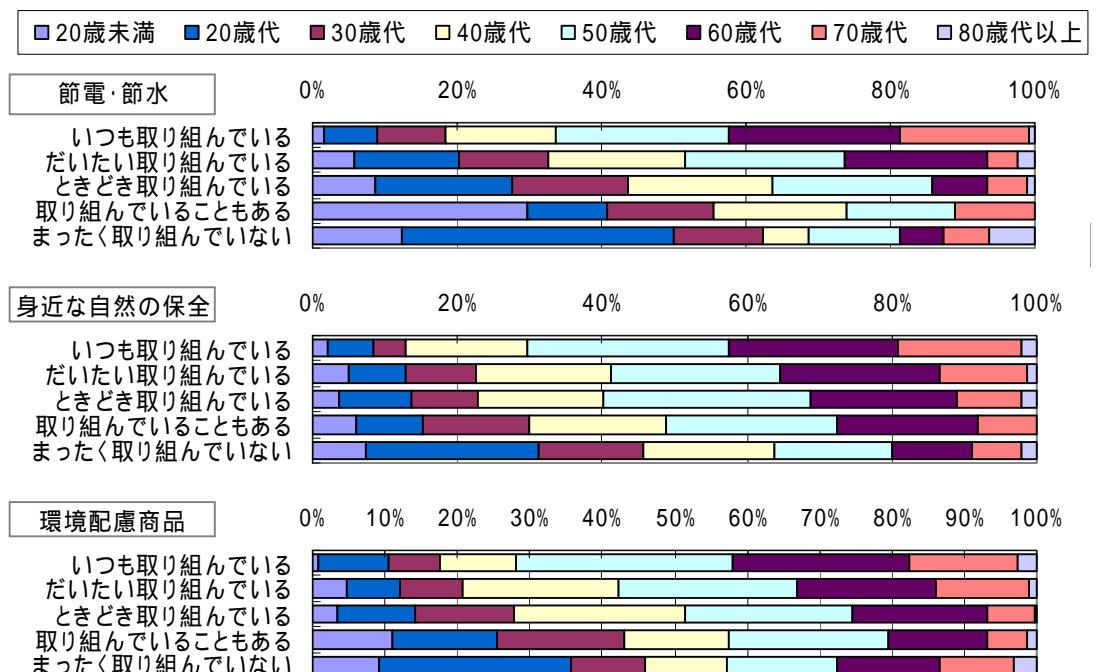
3-2. 年代別

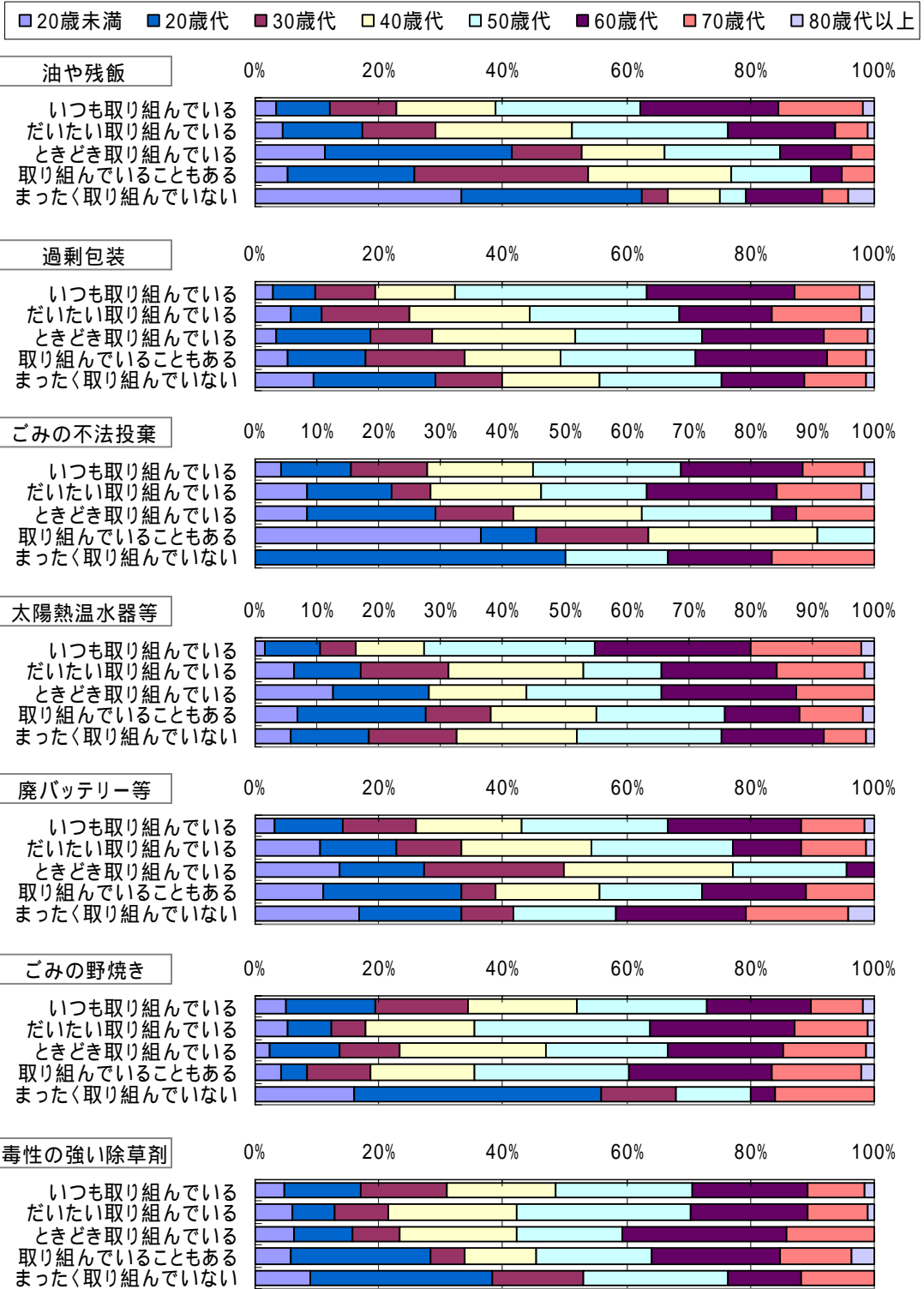
町の環境で自慢できるもの、大切だと思うもの



- 項目により、回答した年代の構成には違いが見られた。
- 「20歳未満」～「30歳代」で多かった回答は、「貴重な生きものの生育・生息地」、「畑や水田などの農地」、「地質学的に特徴のある根なし山」などであった。
- 一方、「60歳代」～「80歳代以上」で多かった回答は、「畑や水田などの農地」、「下仁田戦争跡などの歴史的文化財」、「荒船湖」などであった。

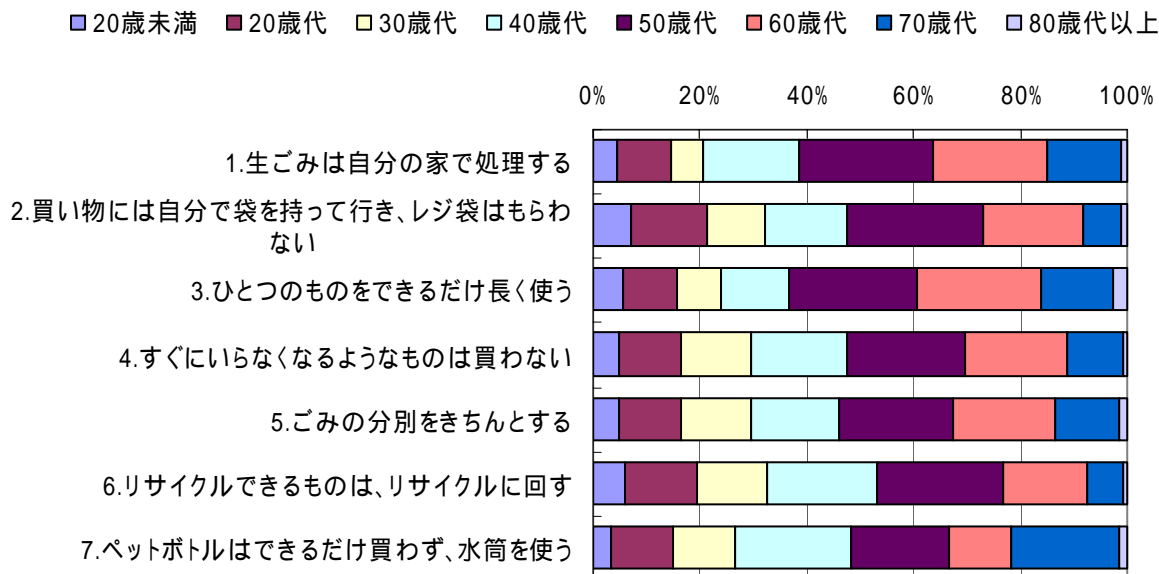
ふだんの生活の中での取り組み





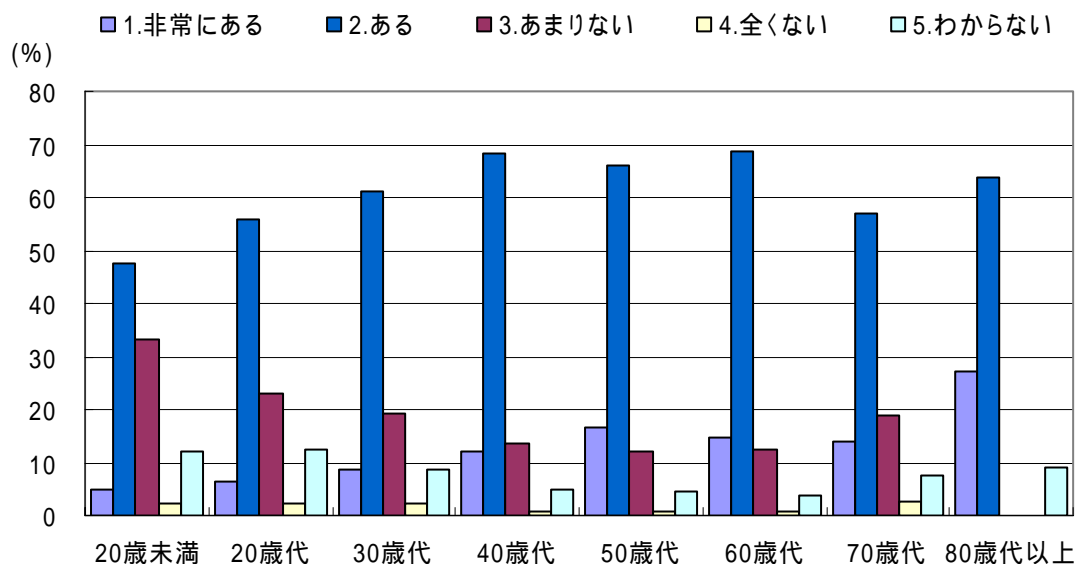
- 全体的に、若い世代ほど取り組みの割合が低く、年代が上がるにつれて取り組みの割合も高まる傾向がみられた。
- 特に、「節電・節水」、「身近な自然の保全」、「過剰包装を避ける」などの項目で、若年層の取り組みの割合が低い傾向がみられた。

ごみを減らすための取り組み



- 全体的には、いずれの項目も似たような傾向を示したが、年代により回答の多かった項目に違いがみられた。
- 20歳代までの若年層で回答の多かった項目は、「買い物には自分で袋を持って行き、レジ袋はもらわない」、「リサイクルできるものは、リサイクルに回す」などであった。一方、中高年層では、「ひとつのものをできるだけ長く使う」、「生ごみは自分の家で処理する」などであった。

環境教育への関心の度合い



- 「非常にある」、「ある」の割合が最も高かった年代は、50歳代であった。
- 20歳未満は、「あまりない」という回答が最も多数を占めた。

4. 異なる調査対象へ行った同等の設問の結果

今回のアンケートでは、異なる調査対象に対して同等の設問を行い、傾向の違いの把握を試みた。設定した設問の項目と調査対象の関係を、下表に示す。

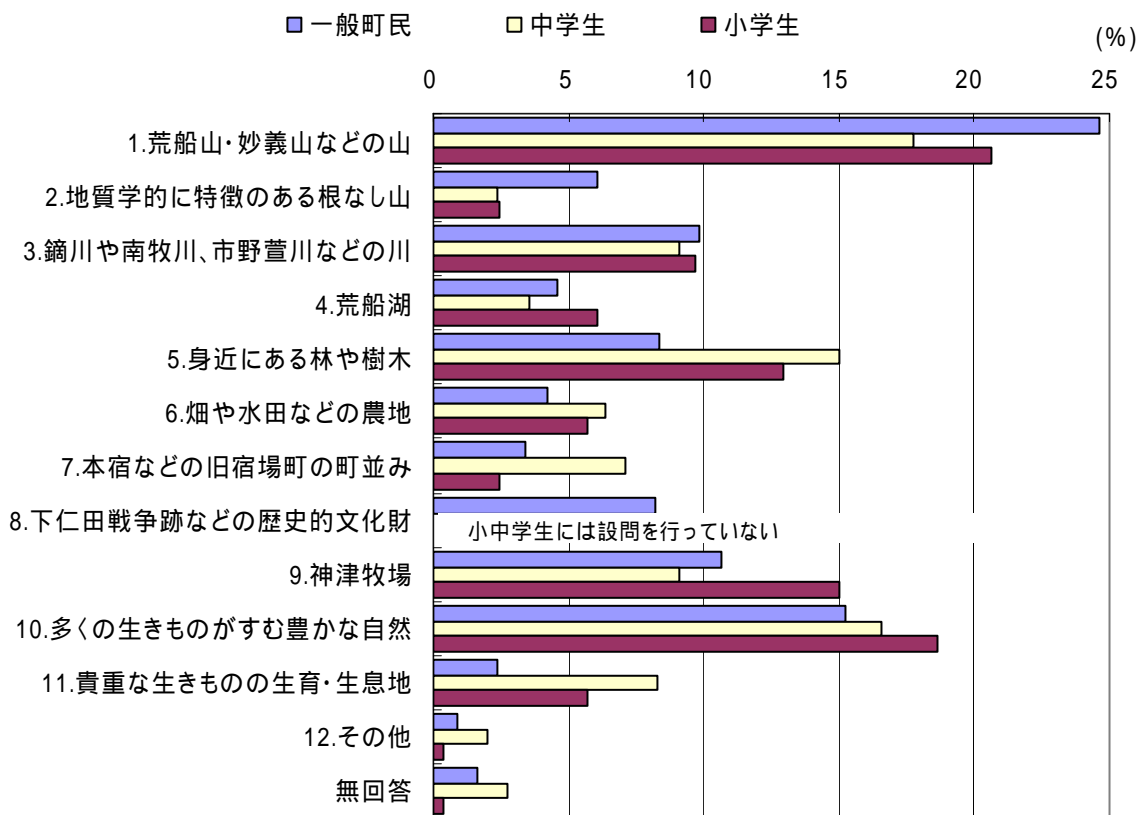
表 異なる調査対象への同等の設問

設問	一般町民	小・中学生	事業所	町職員
町の環境で自慢できるもの、大切だと思うもの	問 1	問 1 ('いいな'と思う環境)	-	-
環境問題に関する家庭内での対話	問 4	問 2	-	-
ごみを減らすための方策	問 5	問 4	-	-
町の環境の将来像	問 6	問 5	-	-
活動の主体	問 7	問 6	問 6	問 4

以下、各設問の結果を示す。

(1) 町の環境で自慢できるもの、大切だと思うもの

この設問は、一般町民、および小・中学生に対してたずねた。



[結果概要]

- いずれの調査対象についても、「荒船山・妙義山などの山」が最も回答数が多かったのは同

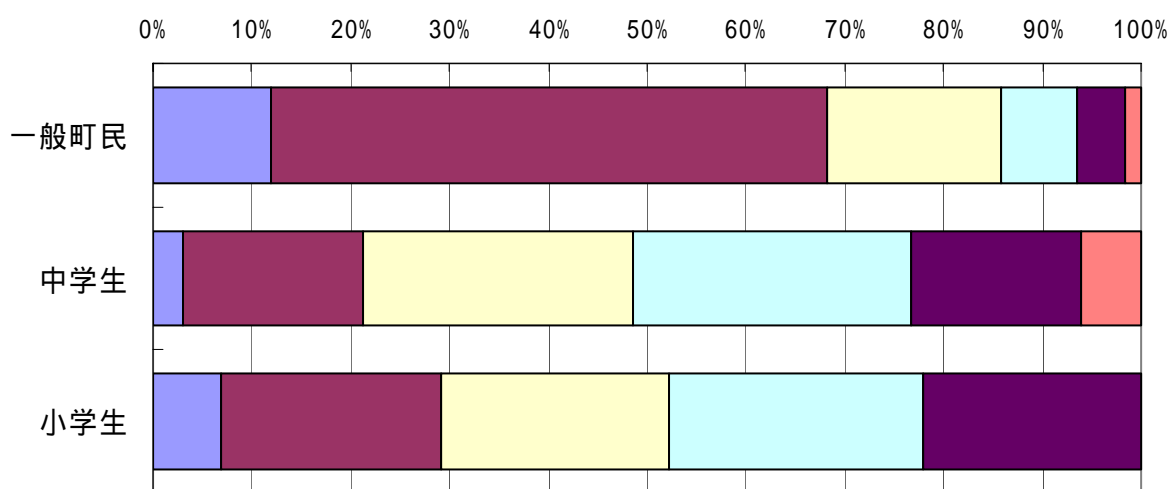
じであった。割合的には若干の違いがみられ、一般町民で最も多く、中学生で最も少ない傾向がみられた。

- 「多くの生きものがすむ豊かな自然」、「貴重な生きものの生育・生息地」については、大人よりも子供の方が重要と認識している傾向がみられた。一方、「根なし山」については、子供よりも大人の方が重要性の認識が高い。

(2) 環境問題に関する家庭内での対話

この設問は、一般町民、および小・中学生に対してたずねた。

- 1.よく話をする。
- 2.時々話をする。
- 3.あまり話をしない。
- 4.ほとんど話をしない。
- 5.全く話をしたことがない。
- 6.わからない

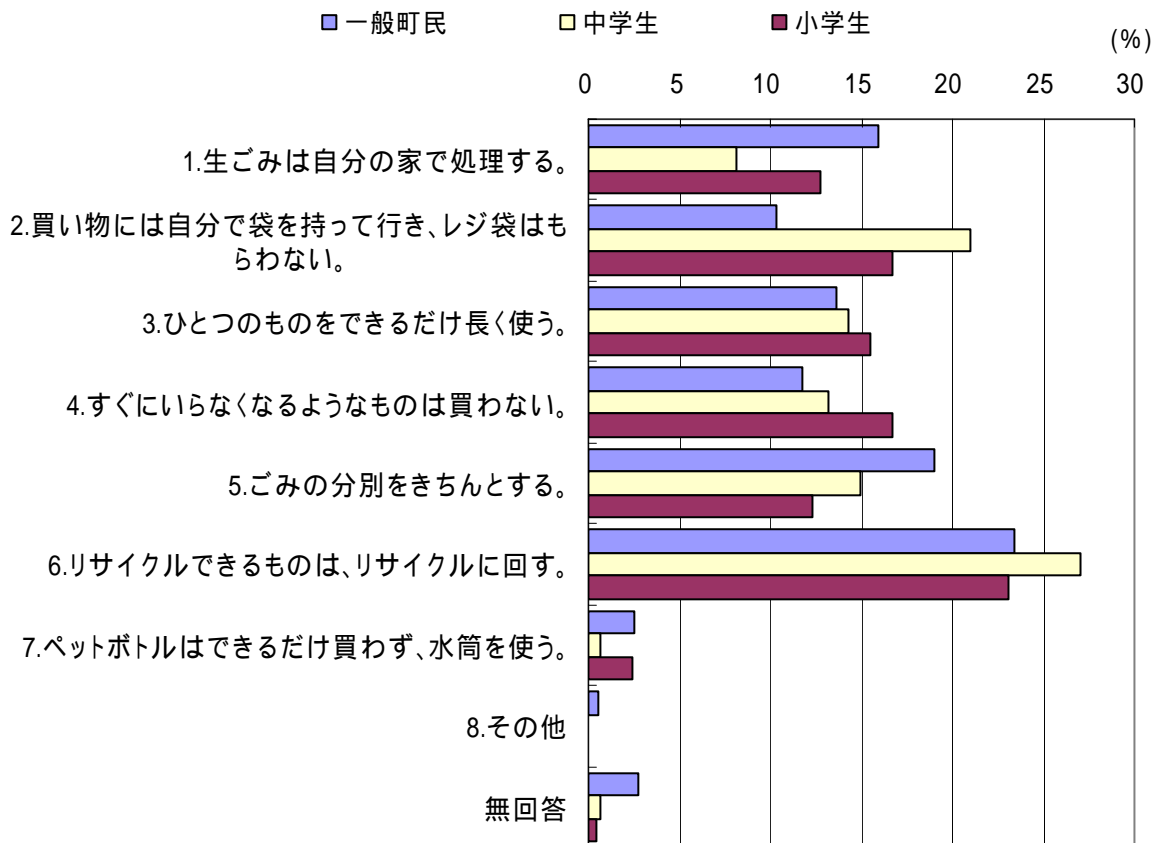


[結果概要]

- 一般町民では「よく話をする」、「時々話をする」の合計が7割近いのに対し、小学生では30%未満、中学生では20%あまりとなった。
- 逆に、「あまり話をしない」、「ほとんど話をしない」、「全く話をしたことがない」の合計は、小学生と中学生がほぼ同様に約71%、一般町民は約29%であった。児童・生徒およびその保護者という調査ではないため一概には言えないが、大人と子供で認識が異なっていることがうかがえる。

(3) ごみを減らすための方策

この設問は、一般町民、および小・中学生に対してたずねた。

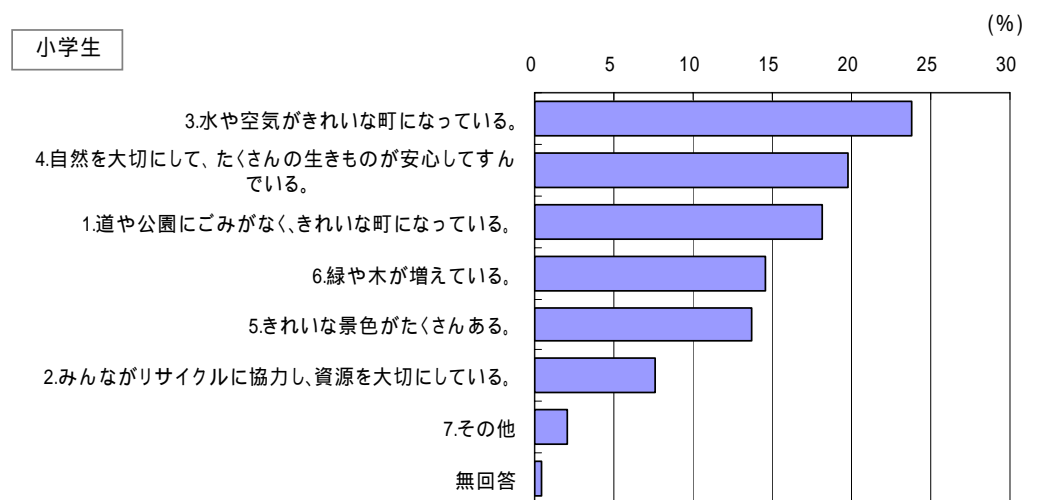
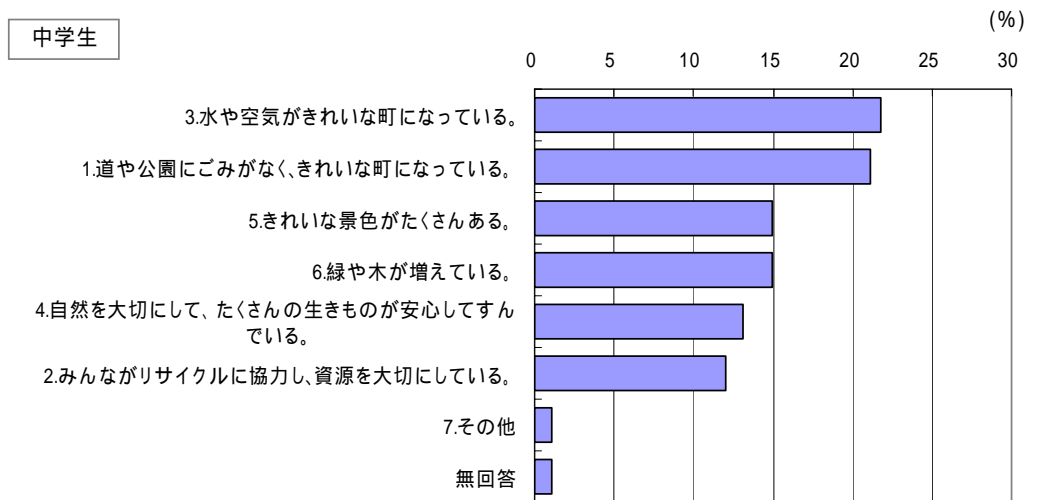
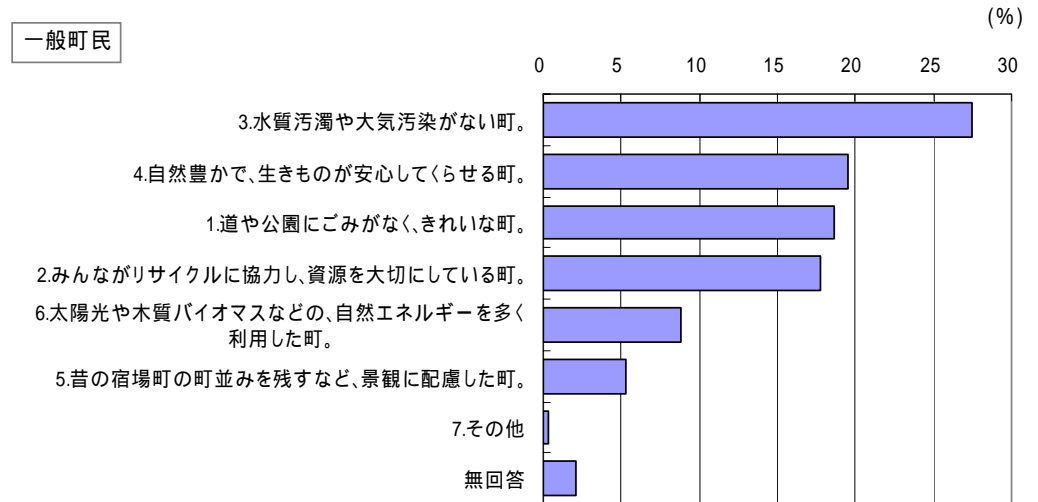


[結果概要]

- 回答の傾向は、全体的に似たような傾向を示している。いずれの調査対象においても、「リサイクルできるものは、リサイクルに回す」が最も多数を占めていた。
- 「買い物には自分で袋を持って行き、レジ袋はもらわない」は中学生で回答数の割合が最も高くなっており、一般町民では低い結果となった。
- 「ペットボトルはできるだけ買わず、水筒を使う」はいずれも低い結果となったが、特に中学生で低い傾向がみられた。ペットボトルの依存度が高いことが考えられる。

(4) 町の環境の将来像

この設問は、一般町民、および小・中学生に対してたずねた。以下のグラフは、回答数の多かった順に並べたものである。



[結果概要]

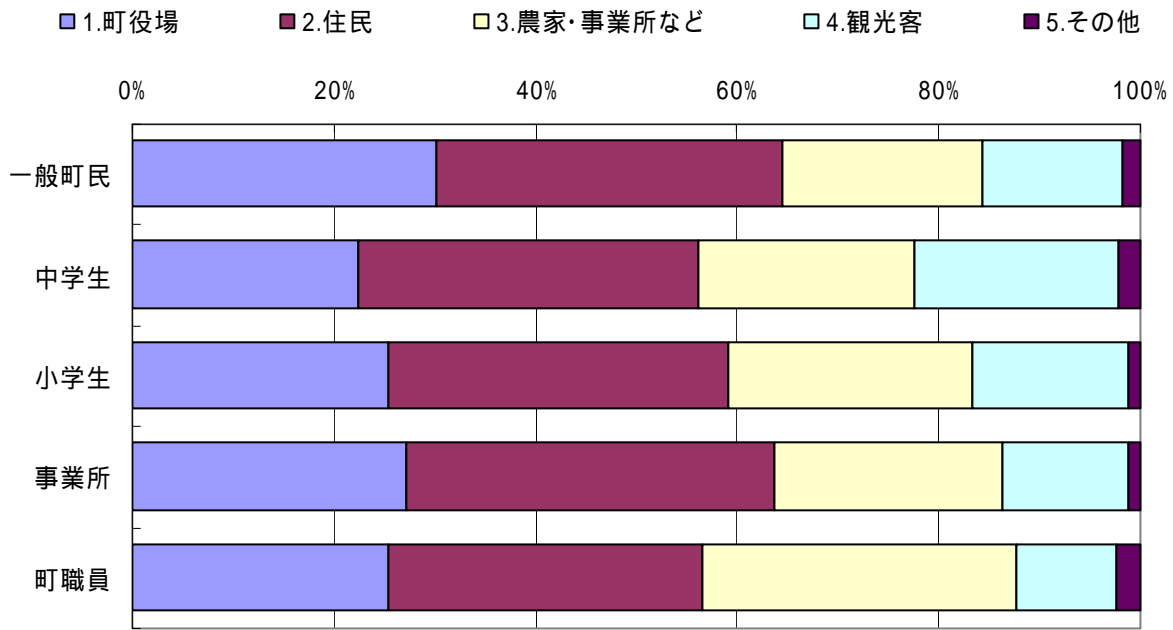
- 回答の傾向は、全体的に似たような傾向を示した。いずれの調査対象においても、「水質汚濁や大気汚染がない（小中学生は、水や空気がきれいな町）」が最も多数を占めていた。き

れいな水、空気が重要であるとの認識が世代に関係なく高いことがうかがえる。

- 「リサイクルに協力し、資源を大切にしている」については、一般町民では比較的多数であったが、小中学生では低い傾向がみられた。

(5) 活動の主体

この設問は、すべての調査対象に対して行った。



[結果概要]

- 回答数の割合に若干の相違はみられるものの、全体的な傾向はほぼ同様の結果となった。いずれの対象においても、「住民」の回答が他よりも比較的多い傾向がみられた。
- 「町役場」という回答が多くなっているのは、一般町民および事業所であった。一方、町職員では「農家・事業所」の割合が比較的高くなっている。
- 中学生の回答では、「観光客」の割合が比較的高い傾向がみられた。